令和３年２月17日　北日本新聞

県立中央病院 狭心症に新検査

心臓ＣＴ スパコン解析

カテーテル不要

患者の負担軽減

県立中央病院は、狭心症などの冠動脈疾患の新たな検査として、心臓のＣＴ画像をスーパーコンピューターで解析する方法を導入した。心臓に管を入れるカテーテル検査が不要となり、患者の負担軽減につながる。

狭心症は冠動脈が狭くなって、心筋に十分な血液が送れなくなる病気。県立中央病院の音羽勘一循環器内科部長によると、血流不足の程度によって、薬で様子を見るか、手術をするかなど、治療方針が変わる。

ＣＴ検査で血管が狭くなった部分が見つかっても、血流がどの程度低下しているか見極めが難しいことも多い。その場合、従来は冠動脈にセンサーを入れて測定するカテーテル検査を行っていた。ただ、手首などの血管から心臓まで細い管を入れるため、入院が必要で、まれに血栓症など合併症のリスクもあるという。

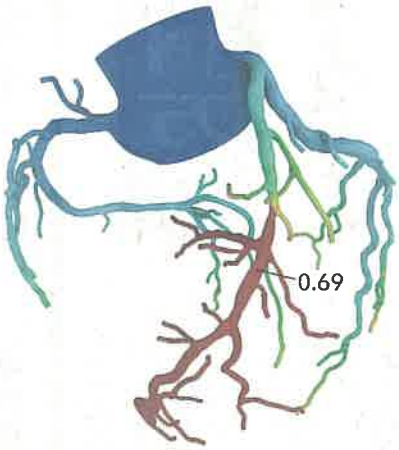
新たに導入した「ＦＦＲｃｔ解析」と呼ばれる検査は、心臓のＣＴ画像を米国の専門機関に送信し、スーパーコンピューターが解析。血流の状態が数値と色で視覚的に表示され、医師はその結果を見て、治療方針を判断できる。

撮影済みのＣＴ画像を使うため新たな検査は必要なく、痛みや危険を伴わないので身体的な負担も軽くなる。音羽部長は「検査のための入院が不要となり、患者の経済的負担も減る。医療機関側も、検査に割いていた時間や人手を治療に充てることができる」とメリットを挙げる。

昨年11月下旬の導入から1月末までに12件実施し、今後は年間約50件程度を見込む。

ＦＦＲｃｔ解析の保険診療を行うためには、日本循環器学会の研修施設となっていることなど厳しい条件があり、1月末時点で導入しているのは全国63病院。北陸3県では富山大付属病院が2019年11月から実施している。（室利枝）

▲ 音羽勘一循環器内科部長



ＦＦＲｃｔ解析による診断画像。赤い部分で血流が不足している